

[092] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10174>

出版情報：語文研究. 92, 2001-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《會員著書紹介》

辛島正雄 著

『中世王朝物語史論』 上・下

本書は、著者の長年にわたる中世王朝物語（従来「擬古物語」の名で呼ばれてきた）研究の集成である。上下二巻計七五九頁の大冊、上下を通じて以下の五部から構成される。

上巻

第Ⅰ部 『今とりかへばや』論

第Ⅱ部 『我身にたどる姫君』論

第Ⅲ部 《女の物語》論・断章

下巻

第Ⅳ部 中世王朝物語のゆくえ

第Ⅴ部 中世王朝物語論・断章

第Ⅰ・Ⅱ部は『今とりかへばや』『我身にたどる姫君』についての論考。その冒頭では『今とりかへばや』における源氏物語撰取の問題が四の宮密通事件の観点から詳細に論じられている。著者の『今とりかへばや』との出会いは古く、ユニークな「あとがき」にも記されている通り、高校時代に接した中村真一郎氏の評論が直接のきっかけであるという。又、今井源衛氏の演習でこの作品が取り上げられたことも「まことに幸運なめぐりあわせであった」と著者は述べている。

つづく第Ⅲ部では「世の中」という言葉の再検討から出発し、『在明の別』『虫めづる姫君』『無名草子』の分析を通じて、「女の物語」を持つ意味を問う。また、第Ⅳ・Ⅴ部はその他中世王朝物語についての各論で、そこに扱われている作品は『木幡の時雨』『兵部卿物語』『八重葎』『いはでしのぶ』『風に紅葉』『浅茅が露』『むぐらの宿』等多数に及ぶ。一例を挙げれば、第Ⅴ部に収められた『浅茅が露』論では、『風葉和歌集』への入集歌数などから物語作者を藤原為家と推定し、従来未詳とされてきた作者論に一石を投じる。さらに為家の哀傷歌集『秋思歌』などその後の新出資料についても、補説や注という形で目配りされている。

近年、「鎌倉時代物語集成」、「中世王朝物語全集」等によるテキスト整備が進む中で、本書が今後の中世王朝物語研究の指針となることは疑いない。

尚、巻末には二十六頁に及ぶ詳細な索引を付し、本書活用の手引となる。

（笠間書院 A5判、上巻 平成十三年五月 三五七頁 八、〇〇〇円、下巻 平成十三年九月 四〇二頁 八、八〇〇円）

白石悌三著

『江戸俳諧史論考』

本書は、平成十一年七月五日に逝去された白石悌三氏の、主に享保期俳諧に関する遺稿を編んだ論文集である。その構成は以下の通り。

第一部

誠と作意

親句疎句

伊達

第二部

英一蝶

芳賀一品

水間沾徳

江戸座の俳人たち

(沾洲瑣事／乾什は竹婦人にあらず／湖十は其角正統か)

大名たちの俳諧

(但馬豊岡城主／京極高住／三河野田城主／菅沼定用 付

享保末期江戸俳人名録／肥後熊本城主細川重賢)

本書の「後記」でも触れられている通り、ともすれば芭蕉研究に於ける業績に注目されがちだった著者の学問の本領は享保期俳諧研究であった。そうした著者の足跡を示すように、第一部では享保期に至るまでの俳諧に見られる諸問題を通史

的に捉えており、第二部では、水間沾徳の詳細な年譜考証をメインとする、個々の作家についての研究がなされている。つまり本書は享保期俳諧を巨視・微視両方の観点から眺め、今まで捉えられることのなかったその全体像を正しく捉えようとした点に、その最大の意義があると言えよう。

従来俳諧史に於いて享保という時期は、元禄と安永・天明という二つのピークに挟まれた端境期という扱いをされ、その研究もあまり進んでいるとは言えない。しかし、俳諧を通史的に捉えるためには、盛んに俳諧が行われていたこの時代を無視して過ぎる訳にはいかないのは自明の事実である。そのことは何より著者が痛感していたことであろうし、そうした観点からこの方面の研究を深化させていくことが、残された者に課せられた大きな課題であると言えよう。

(平成十二年十月 九州大学出版会 B6判 三四八頁 三、八〇〇円)